

ないとう じゅんろう
内藤 純朗

基幹労連・事務局長

希望の世紀は来たか

21世紀になって5度目の正月を迎えた。「戦争の世紀」と言われた20世紀に対し、新世紀は「希望の世紀」とよばれ待望されていた。2001年1月1日、カウントダウンとともに新世紀は幕を開け、そして5度目の正月を迎えた。では、私たちは希望の世紀を満喫しているのだろうか。

私は1950年（昭和25年）山陰の片田舎に生まれた。子供のころの正月と言えば凧揚げ、独楽回し、カルタに羽根突きが定番だった。今ではうそのように聞こえるが子供のころの正月はたいがい雪の中であった。雪の元旦は白く輝くばかりの朝を迎える。朝日が雪にきらめき、その雪の中で凧をあげ、雪合戦に興じたものである。

今は、正月にまず雪は降らない。降っても積もらない。積もってもすぐ融ける。私の子供のころ、雪は深く積もり、数日経っても融けることはなかった。多い年にはカマクラ遊びだっただけで出来たのであった。

「きんま（おそらく、木馬）」という木橇（そり）があり、坂道でよく滑ったものだ。火で焙って形を整えた竹皮を歯の部分に貼り、滑りを良くしたのだから、わずかな傾斜面でも飛ぶように滑った。息を切らして坂を上り、滑り降りてはまた登る。飽きもせず一日中滑った。夕方になると雪が凍るのでさらにスピードが増した。それが面白く暗くなるまで滑った。しかし、やがて夜になるとその斜面の上に住む人たちが

帰ってくる。私たちがアイスパーンにしてしまった坂道は登りにくく、よく転んだようで、見つかると「あっちで滑れ」と怒られた。とにかく一日中外で遊んだ。

そして家の中ではコタツで本を読み、お伽噺を聞き、餅や蜜柑を食べた。テレビはない。あるのはラジオだが、家の隅の高いところに置いてあって子供の手には届かない。本といっても「漫画」である。その漫画は月刊誌で、正月号の口絵にはたいてい未来予想図として、都会の風景や宇宙旅行の様子が描かれていた。

すごいなあ、21世紀になるとこんな世界になるのか、珍しいものやおいしい食べ物、遊ぶものが一杯ある、「早く来ないかなあ」とわくわくしたものである。もっとも21世紀を迎えたとき、私はすでに50歳になっており、遊ぶものはあまり必要ない、ということには気づいていない。

だから2001年の正月には、「子供のころに50歳になると21世紀が来ると知っていたけど、本当に来たらなんだか嬉しい」と年賀状に書いたものである。21世紀はまさに漫画の口絵にあった通りの世界が出来上がっていた。高速道路、スポーツカー、高層ビル、ロケット、人工衛星。あの絵の想像力の確かさに感動を覚えるくらいである。

2003年4月7日に生まれる予定だった「鉄腕アトム」はまだ誕生していないけれど、現実には二足歩行ロボットが踊り、階段を登り、楽器を



演奏している。ロボット犬は今やペット化し、ロケットは月や火星を往復する。しかもこの革新的な技術の多くは20世紀前半に生まれ、20世紀の後半で花開いた。

確かに戦争の世紀と呼ばれた20世紀は、技術革新による繁栄の世紀でもあった。食料供給力は飛躍的に伸び、地球人口は爆発的に増加した。人間の移動速度は格段にあがり、19世紀の80日間世界一周から、わずか1日足らずで世界一周を遂げるまでに進歩した。情報伝達はまさに瞬時と言うレベルにまで高まり、世界の各地で起こっていることを、ほぼ同時に音と映像で知ることが出来る。

しかし、そのような20世紀の技術革新の恩恵を享受しながら、21世紀に入って5度目の正月を迎えても、私たちはまだ希望の世紀を実感できていない。それどころか前世紀の「負の遺産」処理に追われている。

急激な経済発展と人口爆発に伴う富の集中と極度な貧困。雪の降らなくなった正月に象徴される地球温暖化、文化遺産をも破壊する地球環境の悪化。物質的な豊かさに反比例する心の荒み、犯罪の増加。人類の発展の裏側にある負の遺産。まずはこれから片付けなければならない。そうしなければ希望の世紀はやってこない。

私は特に最近の残虐というより「心根のいやしい犯罪」の増加を憂える。殺人や強盗、テロなどの暴力事件もさることながら、弱者を狙い撃ちする犯罪が多すぎるような気がしてならな

い。いじめはもとより、わが子への虐待、教え子へのわいせつ、お年寄りへの詐欺、女性への集団暴行。相手はみな犯罪者より弱者であり、犯人はむしろ被害者を守らなければならない立場にあるものである。

日本には武士道というものがあり（あった？）、あの剽悍な薩摩隼人でさえ「弱者をすすんで保護する」という心根がなければ武士として認められなかった。そしてその心根は日本人全体にごく普通のこととしてあった。

それが失われたのではないか。弱者を蹴倒しても勝ったほうが「得」、正邪よりも損得を先に考える心があふれている。20世紀の負の遺産のなかで、最も対応が難しく復元が困難なのがこの「いやしき心根」ではないかと考える。私たちオヤジの果たす役割は大きい。

でも私は21世紀より昔のほうが良かったとは言わない。昔のほうが良かったこともたくさんあるが、総じて言えば今の世の中のほうが良いに決まっている。昔に戻りたいとは思わないし、不便な生活をしたいとも思わない。でもどんな環境にあっても「心根」だけは変わらずにいられたらとも思う。

よし、今年から「酔ってなんかいないわ～（氷雨）」と放吟しながら、酔っ払ってホテルの廊下を歩くことはしないぞ。21世紀5度目の正月の誓いである。